

クリステイナ・ロセツテイ覚書

——一絃の豎琴——

桑 野 英 正

筆者が数年来関心をもちつゞけているクリステイナ・ロセツテイ（一八三〇—一八九四）は、文学史の中でわずかに数行あるいは数十行で片づけられている詩人である。それも、彼女単独でとりあげられることは決してない。常に「ラファエロ前派」との関連において語られる。たぶんその扱い方は大筋において正しいであろう。どうひいき目にみても、いわゆる超一流の詩人ではない。しかし、次のようなアイファー・エヴァンズの積極的な評価は、十分傾聴に値する。

十九世紀後半の詩歌に、彼女は独自の貢献をした。この時代の主要な、そして通常は異質の二つの運動——「ラファエロ前派」風の装飾を付けた詩歌と宗教的感性を映す詩歌——をこれほど見事に結び付けた作家は少ない。狭い守備範囲とはいえ、彼女の作品には、「テイプリエル」ロセツテイに始まる情熱と「オックスフォード運動」にまで溯ることができる情熱の両者が存在する。⁽¹⁾（「内」は筆者注。以下同じ。）

上の主張を全面的に検証することは、筆者の調査能力を超えている。たゞこれまで彼女の作品を読んできた限りにおいて判断すれば、「狭い守備範囲」という表現には賛同したい気持が大いに働く。というのも、この規定は、一八七〇年四月、長兄テイプリエルに宛てた書簡の中で、彼女自身が使っているある比喩に重なるのではないかと、と推量するからである。

声高に歌いつゞけるには、一絃の豎琴では土台無理です。政治や博愛に題材を求め、ブラウニング夫人のような行き方は、私にできるはずがありません。もともとそのタイプではないのですから。さまざまな領域で歌うのは、すぐれた御方におまかせし、私は言いたいことを言って、あとは口をつぐんでいた方がよさそうです。⁽²⁾

ここに彼女自身が言う、一絃の豎琴に合わせて歌える歌こそ、「狭い守備範囲」という規定が示唆する内容である、と受け取っていい

だろう。そして、そのあたりを細かく探求することが、この詩人の本質を読み解く鍵を発見することにつながっていく、と筆者は思う。そこで、以下その線で考えてみたい。

一 あ こ が れ

頬づえをついてものおもいにふけている、一人の少女を想像してみよう。十七才になったばかりである。多感な少女は、何かを待ち望んでいる。が、それが何であるか、本人にもよくわからない。たゞの恋かもしれない。一步ふみこんだ、セクシユアルな愛かもしれない。詩人としての名声だろうか。それとも、霊的な交わりなのだろうか。いずれにせよ、少女は待っている。そして、今一人の自分に話しかけるのだ。

時々言った、「これはもうやってはこないのだ。／待つのに疲れたから、そのうち期待もしなくなるだろう。／いっそ今のうちにあきらめて、安らかになろう。／それでもあきらめ切れなかった。／

あ、あなたはお馬鹿さん／健康な喜びにも、／有益な苦痛にも不向きな人。／追い求めてもむなししいことを知っているのに、またしても、／気をとりなおしては追いかける。／

『想いのとぎれ』より

一八四八年二月十四日

上の引用箇所を含めてわずか二十行のこの詩は、大人になりかけた、夢見るクリステイナの心の内を語っているという意味で、興味深い。待てど暮らせど、欲しいものが手に入らない、そのために心が苛立つ、だが、若いうちは、これはこれで仕方がないことなのか、——と歌う。何か特定しがたい、いや、むしろそうしたくない複数の願望が、たえず彼女をとらえて離さないのだ。

この時期に、彼女がこのような心の状態にあったことを、われわれは素直に受け入れなければならない。自分の論旨の都合に合わせて、特定の一つの願望にしぼることは、明らかに間違いである。あの時期までのクリステイナには、三つの希求——恋と名声と霊的な交わり——があった。それらがそのまゝ、この二十行に盛り込まれている、と解釈すべきだ。

そう考えるのも、実は、根拠がある。現存するノートブックに記された二種類の原稿の片方には、先の二十行の詩に『三つの段階——その一』と表題が付され、『その二』（一八四九年四月十八日）、『その三』（一八五四年七月二十五日）に当たる詩をクリステイナ自身が「united」しているという。⁽⁴⁾ このことから推量できることは、ある感情が歳月とともに移りゆくさまを三部作としてまとめることが、当初のつもりであった、ということである。しかし彼女は、生前そのようなかたちで公表することはなかった。——この疑問に対する解答らしきものを、筆者は後に用意している。が、さしあたり上に述べたことで十分だと思おうので、本論にもどれば、『その二』のなかに次の二行がある。

わたしの命の一部が死に絶え、一部が病み、そして一部が、／心のなかで今、火のように燃えている。／

『その一』を書いてから一年ばかりたった頃、彼女に何かが起こった。その衝撃は「幸せな、幸せな夢」をこなごなに打ち砕いた。が、それをきっかけとして、それまで判然としなかった「あこがれ」を見つめ直し、その実態をみずから分析する。それが先の二行である。すなわち、〈love〉が死に絶え、〈fame〉が病み、〈sanctity〉が心のなかで火のように燃えているのだ。

恋することなどもうやめようと心に決めたものの、あんなっていいたかもしれない、こうなっていたかもしれない、というむなしい思いがいつまでもつきまとい、心安まる時がない。そこで一念発起し、静かな精神生活に専念しながら、この世での生をおえよう、と決意する。が、小鳥が巣づくりを始める頃ともなれば、冷えていた心がまたしても熱くなってくる、——と歌う。

しかし、既に述べたように、『その二』『その三』は、生前どの作品集にも収められていない。真正面からの自己解説や直截的な内面表白を、彼女は意図的に避けている。このことから筆者は推測する、——心の内をあからさまに表現したくないある種の羞恥心が、彼女にとつては詩作をつゞける原動力であった、と。そのあたりの心組みをちよつとふざけながら歌うと、例えば、次のようなくあいになる。

わたしが秘密をうちあける、ですって？／しないわよ、わたし

は。／そうね、ひよっとしたらいつの日かね。／でも、今日はだめ！一面に凍って、風がふき、雪までふっているのだから。／それにしても、しつこいわいね。恥を知りなさい！／聞きたいの？じゃ、勝手にしたら。／たゞ、わたしの秘密はわたしのもの。だれにも話さないわ。／

『冬——わたしの秘密』より

一八五七年十一月二十三日

二 あ き ら め

クリステイナの宗教的関心の深さは、残した詩作品の大半が宗教詩であることから明らかである。そしておもしろいのは、一見世俗的な作品にまで、無意識のうちに、と呼んでもいいほど自然に、聖書の語句が使われていることだろう。ある調査によれば、⁽⁵⁾数多い引用箇所のうちめだつて頻繁に用いられている章句は、次の二つである。

伝道者は言う、／空の空、空の空、いっさいは空である。／

伝道の書 一・二

望みを得ることが長びくときは、心を悩ます、／願いがかなうときは、命の木を得たようだ。

箴言 十三・十二

統計は必ずしも真実を指すとは限らない。が、この調査に関する限り、上の二つの聖句は、彼女の詩作品の底に流れる思想と情緒を的確に指し示している。例えば、この世の空しさについて、また人間のはかなさについて、彼女は次のように歌う。

空の空、と伝道者は言う。／いっさいは空である。／目も耳も、見ること聞くことに、満足することがない。／朝の露のようなもの、一陣の風のようなもの、／やがてしおれる草のようなもの、／希望と不安にもあそばれる人間は。／この世には、喜びもなければ、楽しみもない。／いっさいが、しまいには、死の長い塵となる。／今日はきのうと同じ。／明日もまた、他の日と毫も違わない。／日の下に、新しいものはない。／おいはれのへ時々の寿命がつきるまで、／いつもの茎からいつものいばらが生え、／相も変わらず朝は冷え、夕暮れは灰色に染まるだろう。／

『たゞ一つ確かなこと』

一八四九年六月二日

もともとこの世は仮の世、と観ずれば、求める〈真実〉がこの世にあらうはずがない。だが、この世に生きている限り、空しいことと知りながらも求めつゞけないではおれないのが、人の性の哀しさである。しかし、所詮、手に入らないものであってみれば、待ち受けているのは挫折でしかない。失意につぐ失意の、この苦しい体験

から、彼女特有の一つのたくらみが、詩作の面で案出される。この世に生きているからこそ隔絶が生じるのであるから、〈死んだ〉と仮定すれば、〈真実〉が実在するあの世との往来は自在である。「わたし死んだら」という発想の詩が多いことの主たる理由は、病弱であったという肉体的側面よりもむしろ、精神の自浄作用という側面に求めるべきであろう。例えば、『ときれ』（一八五三年六月十日）と題するソネットでは、死んで、花と葉に飾られた床にある「わたし」の魂は、遠くにいる恋人がやってくるのを今か今かと待っている。その間、彼の愛について不安を覚えないうわけではない。が、ついに、彼がやってきた。階段を上る足音が聞こえる。把手に手がかった。

その時はじめて、わたしの霊は天国の香りをかぐように思えた。／その時はじめて、のろろと流れていた〈時〉の砂が黄金色に輝いた。／そしてわたしは感じた、髪が光輪を帯びるのを、／魂がふくらんでいくのを。／

みずからを〈死んだ〉と想定し、この世との絆を断てば、解き放たれた心は思いのまゝに夢を見る。が、夢はあくまで夢にすぎない。覚めた時の失望感は、喻えようもなく深い。

わたしが夢見た希望は、一場の夢であった。／夢にすぎなかった。そして今、わたしは目覚める、／ひどくわびしく、やつれ、ふけこんで、／夢のために。／

『蜃気楼』より

一八六〇年六月十二日

クリステイナ・ロセツティは悲しい詩人である。彼女の詩の大半が悲哀、あるいは喪失を歌っている。——これは、ある選集に付された序文の書き出しだが、まさしく核心をついている。著者のエリザベス・ジェニングズは同じ前書きのなかでさらに、クリステイナの全作品に喪失感が漂う、と言う。彼女と同じく、われわれもまた、何故、という疑問を抱かざるをえない。この設問に対する解答を模索する時、筆者としては先にあげた二番目の聖句の前半の、作品中に現れる頻度に注目したい。実に十六回という度数なのである。⁽⁷⁾ 今一度、彼女が読んでいた欽定訳の原文で記せば、——

Hope deferred maketh the heart sick : but when the desire cometh, it is a tree of life.

この箇所には彼女が強く惹かれていた今一つの証拠は、この聖句について彼女自身がコメントを加えていることである。⁽⁸⁾

この箴言の前半は、言及されている心の悩みを深く、鋭く体験していれば、身につまされて分かる。また仮にそうでなくとも、想像すれば分かる。

しかし、後半はどうだろうか。……

希望が先へ先へと延ばされて、どこまで行っても心が満たされる

クリステイナ・ロセツティ覚書 (桑野英正)

ということがない。そこから苛立ちが生じ、ついには厭世的な気分になる。しかし、このような心持ちに、わたしたちはもう慣れっこになっている、——というのである。この世にある限り、絶対的に「全体像」をつかめないあきらめが、彼女の心に巣くっていた。この世のすべてのものが、クリステイナにとってはあらかじめ失われていたのだ。

箴言の後半を証する瞬間は、生涯に数えるほどしか訪れなかった。しかしそれだけに、ひとたび訪れると、そのきわめて稀な瞬間を、狂喜せんばかりに高らかと歌い上げる。

わたしの心は、みずみずしい若枝に巣をつくった、／歌鳥のようだ。／わたしの心は、枝もたわ、に実をつけた、林檎の木のようにだ。／わたしの心は、穏やかな海を漕いでいく、／虹色の貝のようだ。／いや、わたしの心は、それよりもっと大きな喜びにあふれている。／なぜならわたしの愛がやってきたから。／

わたしのために絹と羽毛の高座を設けて下さい。／栗鼠の毛皮と紫の染料でそれを飾って下さい。／鳩と柘榴を刻んで下さい。／百の眼をもつ孔雀も、お願いします。／こがね、しろがねの葡萄の細工を、／木の葉の細工を、しろがねの鳶尾の花の細工を施して下さい。／わたしが新しく生まれかわった日がきたから、／わたしの愛がやってきたから。／

『誕生日』

一八五七年十一月十八日

三 あやまち

クリステイナは散文作品を数点残した。その最初のものが、一八五〇年、十九才の時に書いた『モード』と題する小品である。十五才の少女モードを主人公とする、自伝的要素の濃い物語となっている。この作品は、しかし、生前出版されることはついになかった。稚拙な若書きという事情もあつたらう。だが主たる理由は、第一章で既に言及した、心の内をあらさまに表現したくないという、内的事由によると筆者は推測する。が、後世の研究者にとつては、まさしくその意味で、貴重な資料である。彼女の詩作品の奥底深く秘められた心の動きを知る上で、またとない手掛かりを提供してくれる。検討すべき課題をいくつか含む資料であるが、詳しくは他日の別稿にゆずることとし、こゝで問題にしたいのは、主人公が苦しむ〈罪意識〉についてである。次の三点で、少女は自分を激しく責める。⁽⁹⁾一、詩作品を他人に褒められたい、気になったこと。二、音楽の魅力に惹かれ別の教会の教会に行ったこと。三、社交の場で他人に對する思いやりに欠けたこと。物語のなかで、このように例示された、異常なまでの自責の念は、クリステイナの唯一重大な欠点として次兄ウィリアムがあげている。「over-scrupulosity」の指摘が正しいことを暗示している。この線に沿って考えていけば、過敏で、傷つきやすい良心の持ち主がめざす理想像が、次のような人物であつたとしても別に不思議ではない。

その人はごく若くして既に、美しくあることをやめた。／願ひも喜びもくさぐさの楽しみも棄てた。／むなししいものを見なくても済むよう、わが目を覆い、／きびしい真実を選んだ。／自分には容赦せず、他人には思いやりにあふれ、／しもべの中のしもべとして、人に褒められることなど念頭になかった。／長い祈禱と断食に明け暮れ、／見て聞いて不快なものにも慣れるよう努めた。／それは、苦しむ貧者と寝食を共にし、／最少限のもので事足りるようになるためであつた。／自分を棄て去ることを学んだ。／地上でわが身を利するいっさいが、／天上でわが身を傷つけ、損うものであると考へたからである。／そこで、心静かにその人は、十字架を選び、それに耐え、／そしてこの世のいっさいを憎み、たゞイエス・キリストのみを愛した。／

『或る肖像』より

一八五〇年十一月二十一日

虚飾を排し、欲望を抑え、献身的な愛を實踐し、ひたすらイエス・キリストとの一体化を熱望する、——これが、人生に對し彼女がとりつづけた基本的な姿勢であつた。六十四年の生涯は、この目標をめざす巡礼の旅であつたと言えよう。そして各作品は、途上の感懐を吟じたものであり、〈迷い〉の濃淡を映し出すバロメーターであると言つたら、それは言いすぎになるであらうか。いずれにせよ、上の主題をさまざまヴァリエーションで歌つた。それらの歌を聴いて断言できることの一つは、当たり前と言へばそれまでだが、自己客観化が十分に達成された場合に、佳作が生まれているということ

である。加うるに、〈物語〉の要素が枠組みとして与えられた時、傑作と呼んでもいい仕上がりになっている。代表例を二つあげたい。まず初めに、――

わたしのりんごの木からピンクの花を摘み、／一晚中髪にさして飾った。／それから取り入れの時がきて、出掛けてみると、／そこには実が一つもなかった。／

『りんご狩り』より

一八五七年九月二十三日

牧歌的な田園を背景に、田舎娘の失恋を歌ったこの詩は、わずか二十八行という短さであるが、一篇の悲恋物語を鮮かに、読む者の脳裏に思い描かせる力をそなえている。さらにこの作品には、第二章で触れた〈喪失感〉が歌い込まれ、りんごの花と実の喩えで〈罪と罰〉の図式が呈示される。娘は、わずか一晚身を飾って楽しんでばかりに、収穫時に一個の実も手にすることができなかった、という。〈虚飾〉を戒める教訓とも受け取れるが、豊かな〈物語性〉がその臭みを、気にならないまでに中和している。

次にもう一つの例をあげると、――

少女は大切な金髪を一房切り落とした。／少女は真珠より価値ある一粒の涙を落とした。／それからまるくてきれいな、まるくて赤い実を吸った。／口の中に流れ込むその汁は、岩の裂け目の野蜜よりも甘く、／人の心を明るくする酒よりも強く、／水より

も澄んでいた。／こんなおいしいものは口にしたことがない。／どうして飲んでいるあいだだけで満足できよう。／あの見知らぬ果樹園で実ったくだものを、／少女は次から次と吸って、吸って、吸いまくった。／唇が痛くなるまで吸いつづけた。／

『ゴブリン・マーケット
魔のくだもの』より

一八五九年四月二十七日

クリステイナの全作品中でおそらく最も広く知られているのが、五百六十七行から成るこの物語詩であろう。読みのレヴェルしだいで、作品についての解釈とその評価は、おのずから異なるであろうが、これが彼女の代表作であることは間違いない。

作者は、リジーとローラという姉妹が、魔のくだものを売るゴブリン（小鬼）と関わるいきさつを、話に高い象徴性をもたせて語る。上の引用箇所は、好奇心の強い妹のローラが、ついに誘惑に負け、金貨の代りに金髪でくだものを買ひ、味わっているシーンである。〈感覚的な喜び〉を歌い上げる時の彼女は、何かに憑かれたようにはしゃぎ、はなやぐ。が、その明るさの背後に、絶望的な暗さがあることを、われわれは見取ることができる。感覚を通しての喜びが、はかなく、むなししいものであるがゆえに、それをいとおしむと同時に退けようとする、アンビヴァレントな彼女の態度を感じ取ることができる。この板ばさみの状態から恒久的に免れるために、いかなる欲望の充足も〈罪〉である、とみずからに言い聞かせ、信じ込ませようとする、ある意味で安易な解決法に、大方の読者は反撥と物足りなさを覚えるだろう。だが、そのよしあしは別として、信

仰への傾きが著しいこの詩人の特異性は、まさしくその点にある、と言える。

この物語では、欲望に負けた、——彼女流に言えば「罪」を犯した妹ローラを、姉リジーが自分の命を賭してまで救う、という構成になっている。ここでもやはり、第一章で触れた自己分析力が働き、「罪」に堕ちる自分と、「愛の実践」で罪人を救う今一人の自分を、姉妹の関係になぞらえ物語化した、と解釈することができよう。そして、そのようなかたちでの自己表現の試みが、二つの要素——奇抜で、多彩なおとぎばなしの舞台設定と、「ラファエロ前派」の特徴の一つとして常にあげられる細部描写——とうまく合わさって成功した、きわめて稀な例の一つと言っていいだろう。

さて、これまで見てきたような、心の軌跡を描きつづけたクリステイナは、ある時ふと立ち止まっては振り返り、そして決意する、

以前、わたしは苦勞し、努力した、／快樂を得ようと、休むことなく。／しかし今は違う。／生きて魂を救えれば、／よしあし問わず、ほかはどうでもかまわない。／以前、一人で夢を見た。／ひそやかに、さまざまな願いを抱き、将来の計画も立てた。／——それが、この始末ノ——／もうこの世の者には頼らない。

『心の苦しみは心みずから知る』より

一八五七年八月二十七日

四 夢なき眠り

——結びに代えて

クリステイナには三つの希求があった、と先に述べた。むしろ四つと言うべきであったかもしれない。「生まれた時からその人に嫌気を覚えさせた一切合切」(『憩い』一八四九年五月十五日)からの解放こそ、何にもまして待ち望んでいたものであろう。

なるほど夢を見ることは、麻薬と同じ効果を及ぼし、一時しのぎには役立つだろう。しかし、覚めた時の失意と苦惱は、周期的な夢と現実の繰り返しが重なるにつれて、しだいに深まっていったと思われる。この世のすべてのもの——それがなんらかの喜びをもたらすものであれば、なおさらのこと——を拒絶しないではおれない性分の彼女にとって、夢の安樂にひたることは、破滅の道を歩むに等しかった。

その深い海を測ってみよ、——／その深さが測れる者は一人もいない、——測り繩はあまりに短すぎる。／あまつさえ、見張り番は眠っている。／ある者は苦しい急坂を上る／苦勞を夢見、／ある者は無邪気な羊の遊ぶ／牧草地を夢見ている。／

『波にゆられて』より

一八五三年十月十七日

眠りこけた見張り番の乗った船は、あてどもなく進む。嵐が近づ

いている、前方には暗礁がある、浅瀬もある、——と空に舞う、白い姿の聖霊が、呼びかけては警告する。が、夢にかまけたかれらは見覚める様子もない。あきらめた聖霊は、一つまた一つと、祈りながら去っていく。

夢を見つづけることの危険性を承知しながら、そうしないではおれないクリステイナのわびしさは、想像力によってさらに深化され、次のような心象風景となって作品化される。

どんじりの燕が一羽、荒々しい秋の風に波立つ海を、／一羽さびしく飛んでいく。／あわれな鳥／道に迷うは運命なのか。／この無情な海に落ち、／やさしく見守る目にもめぐまれず、／死んでいく、／身元も問われず、看護も受けず、自由な身のまま。——／あ、短い苦痛が去った後、／ついにお前は解き放たれるのだ、／眠りの中で、死の中で、固く閉ざされた夢なき眠りの中で。／

『秋』より

一八五八年四月十四日

飛び立つのが遅れた一羽の燕にみずからをなぞらえ、その孤独な死を想像することによって、自分自身の死を客観化し、劇化している。この世の煩わしさから解放され、「夢なき眠り」のなかで心ゆくまで憩うことこそ、生きることを絶えず重荷と感じつづけ、自己の良心にこだわらつづけた詩人の、最大の望みであったと言えよう。ここでさらに、筆者の思い込みをあえて口にすれば、その望みは必ずしも、意識的に向けられる天上への熱い想いではなく、むしろ地

上の生き物に自然な、もっと素朴な私たちの安息であったように思われる。この世との訣別の歌とも言える、最晩年の詩では、「夢なき眠り」への渴望が率直に表明されている。次にその歌を掲げること、拙論の締めくくりとしたい。

悩みも乱れも熄み、ついに眠る。／あがきもわななきも去り、ついに眠る。／冷たく青白く、友人も恋人も見えない所で、／ついに眠る。／

悲しみに沈んだ、悲しみに覆われた、／疲れた心は今やない。／心を絞る苦痛も、付きまとうさまざまな不安も今やない。／固く閉ざされた夢なき眠りのなかで、／ついに眠る。／

ぐつすり眠る。葉陰の歌鳥も、／その人を目覚めさせることはできない。突風も、その人をゆさぶることはできない。／紫のタイムと紫のクローバーの下で、／ついに眠る。／

『ついに眠る』

〔タイトルは次兄ウィリアムによる〕

一八九三年頃

テキスト

今日までのところ、詩作品の全集本に近いものとしては、次兄ウイリアムが編集した、William M. Rossetti(ed.), *The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti with Memoir and Notes &c* (Macmillan and Co., LTD, 1904) が唯一のものである。小伝および注釈が付いているので、ある意味では便利だが、編集方法には批判が強い。例えば、全タイトルの索引がない。か、それは小さな欠陥だ。批判の主たる矛先は、専断的な作品の分類と配列に向けられている。クリステイナは生前に数点の詩作品集を出したが、それらの刊行時のありようをわからなくしている、という非難である。未発表の作品を加えた上に、配列まで変えたため、そうでなくとも纏につつまれている詩人の姿をなお一層あいまいにしている、というのだ。

上のような世評をふまえ、収録作品をさらに充実させると同時に、各作品集の初版における作品配列を尊重する全集本(全3巻の予定)が、8年前から刊行され始めた。すなわち、Rebecca W. Crump(ed.), *The Complete Poems of Christina Rossetti — A Variorum Edition* (Louisiana State University Press, Vol. I, 1979, Vol. II, 1986) である。たゞ残念なことに、今のところ、第2巻までしか出ていない。ということとは、1862年から1893年までの生前に、作品集のかたちで刊行された中に収められている作品しか利用できない、ということである。(ちなみに、第3巻には、1847年、彼女が16才の時、母方の祖父によって自費出版された作品集に収められているもの、あちこちの雑誌類に寄稿したものの、未発表のもの、およびその他が含まれるそうである。)

上のような次第であるから、一貫性を保つためには、W. M. Rossetti(ed.) 版を使うべきであろう。しかし、拙論では、一部テキストと批判を含んでいるので、底本として R. W. Crump(ed.) 版を使い、未収録作品のみを William 版に求めた。

注

(1) Hor Evans, *English Poetry in the Later Nineteenth Century* (Methuen & Co., LTD, 1966), p. 103

- (2) William M. Rossetti(ed.), *The Family Letters of Christina Georgina Rossetti* (Brown, Laugham & Co., LTD, 1908) p. 31
- (3) Cf. [love] Ralph A. Bellas, *Christina Rossetti* (Twayne Publishers, 1977), p. 29
[love with sexual happiness] Lona Mosk Packer, *Christina Rossetti* (University of California Press, 1963) p. 29
[fame] Eleanor W. Thomas, *Christina Georgina Rossetti* (AMS Press, Inc., 1966) p. 52
[poetic fame] *The Germ: with an introduction by William Michael Rossetti* (AMS Press, Inc., 1965) p. 21
[sanctity] Margaret Sawtell, *Christina Rossetti — Her Life and Religion* (Folcroft Library Editions, 1974) p. 27
- (4) W. M. Rossetti, *The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti with Memoir and Notes &c* (Norwood Editions, 1977) (First edition, Macmillan and Co., LTD, 1904), p. 477
- (5) Nilda Jimenez(comp.) *The Bible and the Poetry of Christina Rossetti — A Concordance* (Greenwood Press, 1979)
- (6) Elizabeth Jennings(sel.) *A Choice of Christina Rossetti's Verse* (Faber and Faber, 1970) p. 9
- (7) Nilda Jimenez(comp.) *The Bible and the Poetry of Christina Rossetti — A Concordance* (Greenwood Press, 1979) pp. 28-29
- (8) *Time Flies: A Reading Diary* (Society for Promoting Christian Knowledge, 1885) pp. 80-81
- (9) R. M. Crump(ed.) *Maudie: Prose and Verse* (Archon Books, 1976) p. 12
- (10) W. M. Rossetti, *The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti with Memoir and Notes &c* (Norwood Editions, 1979) p. Lxvii
October 31, 1987